

仙人通信 103 滝子山(1620m)

滝子山は大月市の笹子の北側に位置する山で、中央高速の藤野 SA を過ぎる頃から、どっしりとした山様が確認できる。そして大菩薩嶺・小金沢連嶺の南端に位置する山である。国道 20 号線沿いの吉久保集落の稲村神社横から高速を横切り 100m 先にある桜公園沿いに車を止めて、寂憫(ジャクショウ)尾根を詰め、沢沿いを下山するコースとした。林道脇ではピンクのツリフネソウやダテ・僅かに紫に染まったノコンギクが秋を奏でる。2つの橋が平行して沢に架かるが、広い林道を進む。やがて檜林の中に、木片に黒く草書で寂憫苑とある小道が右側にある。半信半疑で、雨で流れた砂利路を進むと、半ば朽ちた小屋が現れ、その先に滝子山の標識である。檜の下の登山路は訪れる人が少ない性か、辛うじて識別できる程度で、木に巻きつけたテープが頼りである。寂憫苑の看板から 20 分程登った所に高圧線の鉄塔があり、更に 10 分程で、峰の山林道である。林道を東に 30m 程進むと、土手の上に寂ショウ林道の標示と危険の標示が、オマケに登山用ロープが張られている。林は明るいミズナラ林となり林床を、コウヤボウキやヤマノギクの花が飾る。赤いガマズミの実も日に輝き、綺麗だ。30 分程すると次第に細尾根となる。時折、猿が隣の峰から、警戒の頬笛を吹いたり、工事用のエアハンマーの音が流れてくる。それらの音が消えると、北風が梢を鳴らす以外静寂が戻り、自分一人を意識させられる。岩尾根は急となり、岩と木の根を頼りにスタンスを決めながら、ほぼ捲く事なしの直登だ。ルート確認のため、上向きが続き首が痛い。岩は石英がピカピカ光る石英閃緑岩である。登り始めは頁岩や粘盤岩であったが変化している。甲府盆地を金峰山から「の」の字状に御坂まで連なる様に石英閃緑岩が取り巻いているが、その右の端であるらしい。ヤマボウシの赤い実も見事で、中学時代大山への遠足で、先生の勧めで食べた事を思い出し、しばし足が止まった。スタートから 3 時間 10 分で浜立山との分岐である。振り返ると太陽を背にして黒い富士山が顔を出す。若干下がった鞍部では紫のトリカブトが一面に咲き。良く観ると、イワカガミの葉・ウスユキソウの種・紫のヒゴタイやモリアザミも咲いている。二つの鞍部を過ぎ約 30 分で小さな山頂である。ほぼ 360 度の展望で南には、三つ峠の上に富士山だ。太陽を背にした秀麗富岳 12 景である。右側には、御坂の山、そして左に道志から奥多摩の山更には、雁摺山・黒岳や湯ノ沢峠と連なる。大菩薩嶺は黒岳に遮られて確認できない。小石で地図を押え、コンパスを置いて、「愛川 藤木構造線」の確認である。紅葉の始まった狭い山頂に、可愛いトリカブトとピンクのママコナの花が、待っていてくれた様で心が癒された。尾根を 5 分程下ると左側に鎮西ヶ池の道標だ。北側を 10 分程進み白縫神社の鳥居と 1m 程の小さな池(鎮西ヶ池)である。この水の滴りが神奈川の水源である。更に 15 分程林の中を進むと、幅 30m もあろうか尾根の木が無いコースとなる。ヒヨドリソウの茶色くなった中に紫のトリカブトが一面群落をなして咲いている。足を前に出せばそのまま体が移動する、なだらかな尾根路だ。やがて大谷ヶ丸の分岐となり、林に入る。動く白い物を感じ、目を凝らすと数頭の鹿の群が谷間に消えていった。沢沿いの路となり、石英閃緑岩を磨くように数mの滝が連続し、轟音を立て、水しぶきをあげる。この小さな滝の連続から山名が出来たのかと、納得した 6 時間でした。(H23.10.08)

コウヤボウキ



山頂



水しぶきを上げる沢

